ロウきゅーぶ!　真帆アフター　～Ｓｈｉｎｙ－Ｆｒａｐｐｅ・真夏に咲く大輪の花～

羅月　-Ragetsu-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロウきゅーぶ！　真帆アフター　～Ｓｈｉｎｙ－Ｆｒａｐｐｅ・真夏に咲く大輪の花～

【Ｎコード】

Ｎ１３８８Ｘ

【作者名】

羅月　－Ｒａｇｅｔｓｕ－

【あらすじ】

ロウきゅーぶのアフターストーリーです。ＦＤ的なもんです。アイリーンやヒナ、もっかんにおされ気味なマホマホを主人公にしてお送りします。サキ？　そんなの知らな（ｒｙ

籠球知らない人の為に人物紹介とか（前書き）

お久しぶりです、実はアニメ7話までしか見てません（笑）

籠球知らない人の為に人物紹介とか

はい、某氏が大量に画像を描き上げたと言う事で私も触発されまして、一本短編を書いてみました。これくらい３０分もあれば書ける。別にこの一回で完結するわけではありませんが。
このロリコンどもめとか毎回言われるので、ロウきゅーぶではありますが小学生達の約８年後（回想は中三でそっから五年後なので八年後と）を描いています。
皆アイリーンは俺の嫁とかひなた、××に×××とかもっかんマジ天使とか言うので今回はマホマホこと三沢真帆を主人公に据えてお送りします。サキ、何それ知らな（ｒｙ

折角なので登場人物の紹介を。

三沢真帆（ミサワマホ）
愛称マホマホ。その持ち前の明るさでかつては女子バスケ部のムードメーカーだった。何でもそつなくこなすが飽きっぽい。

香椎愛莉（カシイアイリ）
愛称アイリーン。かつては周りよりも成長しすぎた肉体がコンプレックスだった。消極的だがとても頑張り屋さん。

袴田ひなた（ハカマダヒナタ）
愛称ヒナ。『おー』が口癖（マホに教わった）。舌足らずでゆったりとした口調。『無垢なる魔性』（イノセントチャーム）の持ち主でその純朴さは多くのロリコ……人間を虜にする。

永塚紗季（ナガツカサキ）
愛称サキ。冷静沈着で大人っぽい。浮いた話が大好き。皆のまとめ役で根っからの指令塔気質。両親はお好み焼き屋さんを経営してお

り、お好み焼きを作る時は人格が豹変する。

湊智花（ミナトトモカ）
愛称もっかん。卓越した身体能力でかつての女子バスケ部を率いた。負けず嫌いで熱中すると周りが見えなくなるせいで一度は孤立したこともあったが、真帆達、そして昴（後述）のお陰で再びバスケへの情熱を取り戻す事が出来た。

長谷川昴（ハセガワスバル）
愛称すばるん。真帆達が小6の時高1だった。部長の不祥事で自身の所属するバスケ部が停部になるも、美星の策謀にはまりながら（？）バスケへの情熱を取り戻していく。色々名言（迷言）を残している。

篁美星（タカムラミホシ）
小学校時代の真帆達の顧問ですばるんのいとこ。適当に見えてしっかり子供達の事を考えている。にゃははが口癖。

Ｏｎｅ（前書き）

芯は同じでも色々変わっちゃったもんがある、ってのをコンセプトにおいてます。

One

『行ける……行けるよマホっ！！！！！』
『おー、そこでシュートだ～』
『大丈夫、出来るよっ！！！！！』
『決めちゃいなよ、マホ……！！！！』

時間が逆行する。幻想が現実へと姿を変える。あれは中学校最後の県大会決勝、勝敗を分かつフリースロー。

汗を吸ったウェアはとても重くて、それでも足を曲げる。左手を添える。目線の先はゴールを見据えて。

『頑張れ、マホ……っ！！！！！！！』

『おうっ、任せとけ！！！！！』

そして5年後……

「な～アイリ～ン……」
「もう……どしたの、マホちゃん？」
「なんつーかさー……『」

「暇じゃね？」

ロウきゅーぶ！　真帆アフター　～Ｓｈｉｎｙ－Ｆｒａｐｐｅ・真夏に咲く大輪の花～

うだるような暑さの中棒付きアイスをペロペロしながら、大学２年になった私こと三沢真帆（ミサワマホ）はぐでーんと背もたれに寄りかかっていた。

一応バスケのサークルに入ってはいるがその実は飲みサー、ちゃんとした部室はあるのだけれど何代か前の先輩でまともな活動はほとんど中止されている。

アイリーンこと香椎愛莉（カシイアイリ）は私の嫁なのでこうして一緒に居てくれているが、この前彼氏が出来たらしい。まあ今まで出来なかったのは彼女が可愛すぎるのと背が高すぎるからだろうけれど。最近ではヒールなんか履いたりして、昔のおどおどした小動物的な要素は何処へ行ったのやら。

ついでにこの嫁は腕っ節がやばい。本気で怒らせると台風の如く暴れる。私はもう一本アイスを冷蔵庫から取り出すと（素敵な事に冷蔵庫まであるんだぜ）またもしゃもしゃし始める。

「まあそうだけど……律儀に顔出してるよね、マホちゃん」

「そりゃあそこにアイリーンが居るかｒ……ん、もう時間？」

「うん……最近忙しくて」

この娘は何時からだったかモデル業に手を出し始めた。その抜群のプロポーションを業界が放っておく訳もなく、大学一年の春にスカ

ウトされ今に至る。

「今度誰かのサインでも貰ってこようか？」
「あーいいよ、最近のアイドルはアイリーン以外興味無いし」
「そっか……うん、それじゃあ行くね」

カツカツと言う音を立ててアイリーンは部室を後にする。ガタガタと鳴っていた窓がその震えを止めた。建てつけが悪いせいで微風でもガタガタ言うこの窓だがそれすらならないと言う事は風が吹いていないと言うわけで、となるとちょっと困る。熱い。

ただでさえ湿度の高い季節に気流が流れないとなると汗もだらだらで……と思いきや食べていたアイスの棒の先端が姿を現す。何とそこには『ア』の文字が。

なんか暑さも吹っ飛んだ。帰る途中で引き換えよ～……と、思いきや。

「おいおいなんだよこれ……」

何と言うかまあ、棒には『アッカリーン』と書かれていた訳で。とりあえず棒をへし折りゴミ箱へ投げ捨てる。淵に棒が引っ掛かる（何かすげえ）が別にそのままにしておいて、私は部室を後にしようと椅子を立つ。

その時だった。何の振動を察知したか知らないが棚に積まれていたバスケットボールが落ちてくる。バン、と言う独特の音が鳴る。

「っ……！！！！！！！！」

全身が逆立つ。体中の汗がより周囲の空気の流れを鋭敏にし、一気に血液が全身を巡る。

「……」

下らない、本当に下らない。自分はバスケを辞めた身なのだ。アイリーンも、ヒナも、サキも別々の道を歩んでいる。もっかんだって日本には居ないし……それぞれ別の道を歩み出した。もう自分達はあの頃には戻れない、過去にとらわれていてどうする。

パーリラ、パリラパーリラ（注：着信音です）……メールだ。この着信音が鳴ると言う事は……

「みーたんか……」

嘗ての恩師、篁美星（タカムラミホシ）先生からだ。そういやあの人今何歳なのだろう。とりあえずメールの内容は単純明快。『暇だったらうちのバスケ部に来ない？』だった。

大学生は夏休み長いけどそんなに暇じゃないんだよ……などと思ったりもしたが、さっき自分で暇だ～とか言ってしまったのでどうにも引く訳にも行かず、溜息を大きく一つついて返事を返した。

『すぐに行きます、練習時間はうちらがやってた時と同じで良いんですよね？』

Ｏｎｅ（後書き）

大学２年生が主人公と言う事で、等身大の気持ちで書いて行きたいです。別に私の年齢に合わせたわけではないのですがね（理由は後で分かるかと）

Ｔｗｏ（前書き）

話自体はすぐ書きあがったんですが、その後の推敲やらでかなり手間取りました。めんどいな～。

ただあのプロジェクトを完成するにあたってやはり本気で書くスタンスを外せないと言う事で結構頑張りました。

後バスケを本格的にやった事の無い私にとって用語やらポジションやらちんぷんかんぷんです。よくやろうと思ったよ過去の私。

と言う事で主軸はぶらさないのですが少しやろうと思っていた内容は別のに差し替えます。

Two

「おー、久しぶりだな三沢～」
「先生……全然変わりませんね」

慣れ親しんだ慧心学園初等部の体育館。時と共に色んな場所が老朽化していたのがとても気になる。てかこんなんで大丈夫なのか、老朽部とか言われた日にはトラウマで引き籠るぞOGとして。

彼女は篁美星（タカムラミホシ）、かつて色々お世話になった恩師だ。そしてまあ中々信用できないのだがすばるんの叔母でもある。

私自身、前のように気さくに『みーたん』と呼ぶことは無くなっていたがそれでもこの人との関係は変わらないでいた。

「だろ～、まだまだお肌もぴちぴちだぜい」
「やっぱり身長はあの時のままなんですね」
「あのな～、もう成長期は終わったっての……まあそれはおいといて」

学校行事の関係で練習時間が早まったらしく、私が来た時には既に模擬試合の練習に入っていた。

「どうだい、新生チームは。6年は先の大会で殆ど引退しちゃったから、まだまだ見せられるもんでもないけどさ」
「……さあ、現役を退いて結構経ちますし、ちらっと見ただけでは何とも」
「だってさ……お～い、うちの卒業生の三沢真帆先輩がお前らの練習にがっつり付き合ってくれるってよ～」

今まで練習をしていた生徒達の動きが一瞬静止し……

ドドドドドッと掛け込んできた。

「せんせぇせんせぇ、あたしの練習付き合って！！！」

「ちょっと、一人だけ抜け駆けしないっ！！！」

「せんせー、彼氏とか居ますか！？」

「ちょぉ待ちぃ、その質問はウチがするつもりやって言うたのに！！！」

どいつもこいつもぺちゃくちゃと……そう言えばうちらもこんなだったな、そう思うと胸がチクリと痛くなる。

あの日すばるんが初めて来てくれた日、私は部員全員にメイド服を着せてお出迎えした。突飛な思い付きだったけれど、ほんとに下らない事をしたもんだったな～……

「だーーーっもう黙れっ！！！！！！　……ガキんちょが、お前らなんて全員分見てやるよ！！！！！！」

「決まりだな、Ａチームローテーションで模擬試合するぞ！！！！」

おー、の掛け声と共に散らばる。中々統率力のとれたチームだ。

「笛、これくらい吹けるだろ？　おい、お前らも入れ。今回は７対７でやっていいぞ」

審判等などの補欠選手もコートに入り、恐らく事前に指定していたらしいポジションに入る。先生はスコアボードの後ろに立ち、私を反対側に立たせる。

ピピーーーッ！！！！！！！

「お前ら体力無さすぎ。もっと走り込まないと、本戦の試合じゃもっとプレッシャーで疲れるんだからな！！」

はーい、と元気に返事をしてバラバラ散っていく生徒達。柄にもなく本気で色々やってしまった。まず審判の立場から欠点を指摘する時点でアウトだと思うのだけれど、まあ良いか。

……一人だけ散らない奴が居た。とても背が低い、銀髪のショートヘアで勝ち気そうな瞳をした釣り目の少女。

さっきの試合でもすこぶる動きが良かった。だがコントロールがささつで、どうしても個人プレーに走ってしまうのが気になる。

「私、千早結奈（チハヤユイナ）って言います！！！！　先輩の事は聞いてます、私と同じＰＦで無敵の強さを誇ってたって……」

「無敵って……昔の事だし。それにあの時でもそんな上手くいっちゃいなかったよ」

「それでもあの的確な指導……私の気がつかない所まで指導して下さって本当に感謝してます……あの、私は今後どうしたらいいでしょうか？」

基礎ステータスは多分誰よりも高い。それに加えて最近伸び悩んでいる事は休憩時間に先生から聞いていた。足も速い、誰よりも走り続けられる。だからその練習、普段の走り込みなどの基礎練習以外に何か欲しいのだろう。

「結奈、だっけか。あんたのその俊足と体力の高さは立派な武器だ。それに私もそんな背が高いわけじゃなかったし体格面でも問題無い。だから自分の武器を精一杯活かすんだ。しっかり走り込んで、パス回しの精度上げて、それから」
「そんなんじゃっ！！！！　今のままじゃ絶対来月の試合には間に合わない、私がもっと皆を引っ張っていかないといけないのにそんなk」

乾いた音と共に結奈が黙り込む。私も結構酷いなと思いながらもその険しい顔を崩さなかった。

「うぬぼれんな」
「うぬぼれてなんか……私は、今のままじゃ駄目だって思ってるからもっと強くなりたくて」
「じゃあ何で他のやつらと一緒の練習が嫌なんだ。お前らなんて所詮大差ないんだよ。確かにお前は上手い、だけどお前みたいな奴が集団に居ても邪魔なだけだ」
「なん、で……っ……何でだよっ！！！！？　折角こっちが下手に出てんのにそんな上から目線で物言いやがって！！！！！！」

涙でうるんだ瞳を最後に彼女は走り去って行った。どうせ彼女は誰にも見られていない所で人知れず泣くのだろう。自分もそうだった、だから別に同情はしない。

「あらら……大分厳しい事言ってくれるじゃん。かつての自分見た気がしてキレちゃった？」
「別に……指導者に牙をむく選手は要らないんじゃないかなと思っただけで」
「それがキミの本意かい？　三沢真帆」

変に作った言葉が紡ぎ出される。先生はにやりと笑い声のする方を向いた。

「随分遅かったんだね……袴田ひなた」

「ヒナ……っ！！！？」

「何も君の本質は変わっていないと見える。少しくらい大人になったと思っていたボクがバカを見たよ」

そこに居たのはかつての仲間だった。看護学の実習が終わって着替える間もなくやって来たらしくナース服のような物を着ている。

Ｔｗｏ（後書き）

神メモ～。誰が何と言おうと神メモ～。ニートたんてー。ひなた主人公でも良かったのですが（というか書きたかったよ）それだと私の求める本質が描けないのでこうなりました。

余談ですが、飯食ってません。つくづく私は萌だけで生きて行けると実感。

Ｔｈｒｅｅ（前書き）

かなり遅くなりましたが最新話です。

Three

「てか何だよその服、袖が余ってんじゃないか。何か、自分の小さを棚に上げて見栄でも張ったか？」
「ボクの身体のサイズじゃ胸が大きくて入りきらないんだ。この年齢にもなって未だにすっとん共和国のキミには未来永劫分からないだろうが」
「言いやがったな……」

どうやら会えない４年間が色々変えてしまったらしい。純朴なヒナを返してくれ。などと思っていると、また誰か入ってきやがった。

「まあ今日はボクだけ来てるわけじゃないんだが……」
「久しぶりだな、真帆」
「ナツヒっ……そうか、そう言う事かよ。そこがくっついてたなんて全然知らなかった」

竹中夏陽（タケナカナツヒ）、かつては何やかんやで何時も喧嘩していた喧嘩仲間だ。だが幼き日の彼とはまるで違う。大人びていて背も高い。声も低くて、その隣にいるヒナの父か何かに見えてしまう。

「まあ、色々あったからね……とりあえず手短に用件を言わせて貰おうか」
「なんだよ、何かあんのか？」
「硯谷女学園と慧心学園の親善試合がね。ついでに、あの時の雪辱を晴らしたいとの要請が藍田未有（アイダミユ）から来た。どうせなら、親善試合の日にやりたいらしい」
「あのちびリボン……それで……私にその試合参加しろってのか？」
「ついでに慧心の後輩たちにも色々指導してやって欲しいと、我ら

が恩師の要望だ」
「にゅふふ、そう言う事なのだよ。別にあんたんとこ来月末まで暇だろ、愛莉からＯＫ貰ってるし、大学でもなお続けて……」
駄目だ、話にならない。私は踵を返した。ちょっと待てよ……そんな声が聞こえた気がするがどうでも良い。知らないわけじゃないだろうあんた達、よくいけしゃあしゃあとそんな事が……

「また逃げるのかい？」
「……ヒナ、今何つった？」
「また逃げるのかいって言ったんだ」
「はん、高校入ってすぐバスケ辞めたあんたに言われたくないね！！！！」
「それでもキミよりましだと思うけどね……何なら、勝負するかい？」

あからさまな挑発だった。それに乗ってしまった自分が悪いのだが。だがひなたが中学卒業と同時にバスケも卒業したのは本当の話だ。
そんな奴に……確かに悪いのは自分だが、それをまた蒸し返されるなど死んでもごめんだ……！！！！

「折角広いコートを使えるんだ。時間は1分、それまでにボールをボクから奪ってゴールにシュート出来たら勝ちだよ。何せ、敵に体当たりでぶつかって活路を見出す、それがＰＦの役目だろう？」
バスケットボールを持ちコートの真ん中に歩いて行くひなた。袖ダボダボで胸きつきつ（少々許し難い面ではある）、おおよそスポーツ向きではない服装で、一分も時間をくれるなんて舐め過ぎにも程がある。

「１０秒でけりをつける」
「面白い……やってみろ」
容赦は無かった。数秒でけりをつけるつもりだった。フェイントも何も無い速攻、風が吹き抜けるようにボールをかすめ取る。
ボールは自分の右手の中にあった。それをそのままドリブルしゴール手前にまで走る。他愛もない、だが本気で完膚なきまでヒナを負かさなければならなかった。
息を吸う。いつものフォームでゴールを見据える。かなり低いゴールネット、それでも狙いは一つ。膝を屈め、腕を伸ばした。
……しかし。
「行けっ……っ！！！？」
「気付かなかったみたいだね」
先程自分が見せた神速を越えるスピードで、ヒナはゴール前に移動し、その身長に見合わない跳躍でボールを奪い取った。
類稀なる努力の末フォワードとしての適性を開花させたヒナのスピードとジャンプはあの時と比べても遜色ないどころか遥かに上回っている。
だがそれ故に非常に腹が立った。全てが彼女の筋書き通りだったのかと思うと、非常に腹立たしく怒りがこみ上げてくる。
「っ……まだ終わってないっ！！！！！！」

どちらも本気だった。ヒナは自分の武器を最大限生かし低空ドリブルのままスピードを以てひっかきまわす。自分もそこまで背が高い方ではないがヒナのつくボールは非常に奪い辛い。

小学生用の狭いはずのコートがこんなにも広く感じるなんて……そしてやっとコーナーに追い詰めた、一対一ではボールをパスする相手もいやしない。時間は残り十秒、強引に当たりヒナの機動力を無効化しボールを奪う、時間が無い、私はゴールましたに入り込み、そのまま高く跳びあがった。

「くっ……させるかっ！！！！！」

ヒナの最高点は私の最高点よりも高かった。このままではダンクを決める前にボールを弾かれてしまう。以前もこんな事があった、同じ境遇で対策を練っていないわけが……

「無駄だぁあああっ！！！！！！！」

ダンクでは無く、ほぼ垂直にボールを打ち上げる。ヒナの手はボールをかすめ、ボールは上空へと投げ上げられる。ヒナとボールは同じように重力に引かれ、その距離は伸びこそすれ縮む事は無い。

『頑張れ、マホ……っ！！！！！！！』

「……っあぁぁあぁぁあああっ！！！！！！！！！」

フッ……ガタンッ、ガタンッ、ガタンガタンガタンガタンッ……

ドン、ドン、ドン、ドン……

「……」

タイミングも狙いも完璧だった。だがヒナの掠めた右手がボールの軌道を僅かに変化させ、枠に散々弾かれたボールはネットの外へ転げ落ちたのだった。少なくとも周囲はそう思っていた。

「……」

「あっ、待てよみｓ……」

美星の説得も聞かず、踵を返してその場を後にする。悔しさと哀しさをその身に湛えたまま。

「あんた……バスケ辞めたって……」

「ああ、そうだよ……ボクの進学先のバスケ部はボクが入ってすぐに潰れたよ。兄(に)いの気持ちが痛いほどよく分かった。でもそれをそのまま伝えるのは酷だったんだよ……」

気丈に振る舞っていたヒナが悲痛な表情をかつての恩師に見せる。達観した所はあっても年相応の幼さが顔をのぞかせていた。

「あれからバレー部で鍛えながら自主練も欠かさなかったんだけど……本当はズタズタにプライドを引き裂いて、奮起してほしかったんだ。だけどやっぱりマホは凄い。凄いからこそ……凄く悲しいんだよ」

「ヒナ……」

哀愁は風の音に乗って。荒涼とした体育館を撫でては別の所へ流れて行く。

Ｆｏｕｒ（前書き）

お久しぶりです。色々あって忙しかったのですが何とか四です。

原作も徐々に読み進めやっとこさ3巻まで来ました。ＰＳＰ版ロウきゅーぶも練習パートが少したるいですがおおむね良好です。

もっかんのステータスが初期からかなり高いのとアイリーンのトレーニング成功率が若干低めっぽいのは仕様なのかな。

そしてアイリーン、もうちょっとゴール下からのシュートは簡単に決めてくれよ。

Four

（くそっ、くそくそくそぉっ……）

大学の近くにある何の変哲もないアパートの一階、私の家は此処にあった。自宅から通う事も出来たのだが一人立ちしたいと言う事もあり豪邸を捨ててこの小さな９，５畳の部屋に移ったと言うわけだ。

仕送りで十分食べて行けるので特にバイトをしている訳でもない、何をするわけでもないからこの空虚な部屋を嫌な気が満たしていく。

木星の如く深い重圧にさいなまれながら悶々とする。ただひたすらに悔しくて、悔しがっている自分に違和感を覚えてまた悶々とする。

バスケを辞めたと言っておきながら、ヒナに激怒し大人気も無くぶつかりそして持てる力全て出し尽くして攻め落とせなかった。あいつが高校に入ってから今までバスケに触れていたかいなかったかなどどうでもいい、自分が何をしたいのか分からない。

自分がバスケへの情熱を未だに燻らせているなど信じたくもない、だって自分は……

「ああもうっ、らしくないらしくないっ！！！！！」

乾いた言葉が誰もいない部屋に反響し自分に何発か突き刺さった。いたたまれないので冷蔵庫を開けキープしておいたビールを取りだす。先月の頭めでたく２０歳になったので何の文句を言われるいわれもない。

プシュッと言う音を立てて缶から飛沫(しぶき)が舞う。酒に弱い私にとって酔いが回るのは一口で十分なのだが、この日ばかりは飲まずにいられず。

容易く一本全部飲みほしてしまう。何だか今日は行ける気がする……根拠のないバカみたいな直感を信じて冷蔵庫を再び開ける。ついでに裂刹・イカするめ（↑商標登録済み）を棚から取りだし開封する。侵略したくなる味らしい。

「ふぅ～……何やってんだかな私……あれ、わた、し……」

視界がグラグラ、頭がぐわんぐわんとする。まずい、常温でビールを放置するなど愚の骨頂、寝落ちにしてももう少しましなやり方があると言う話だ。

朦朧とする意識の中ビールの缶を掴み（何度か手を滑らせた）何とか冷蔵庫の中に帰還させる事に成功する。ガタンと静かに扉が閉まり、冷気が遮断される。

謎の達成感、それと共に糸を切られた操り人形のように身体が崩れ落ちる。こんな所で寝て、また風邪引くよ……アイリーンなら絶対そう言うにきまっている。

でも良いじゃないか、もう大学生なんだし、自分のたいちょ、体調くらい、自分、で……なんと、k……

『……んで……』

『……んな、真帆……』

『……んでだｙ……う……て……って……うんだよ……』

『……んっ！！！！！！！』

「……んあ」

馬鹿な夢を見た。馬鹿な寝方をした自分にはお似合いの夢だった。忘れたくても忘れられない記憶の断片が今日も自分を苦しめる。

朝日が差し込む夜明け、今日も蒸し暑い日常が始まる。いつもと同じ、しかしそれは徐々に自分の日常を侵食していたのだけれど……

「そうか、今日は日曜か……」

その非日常に気付く術も無いままに。私は着替えて街へ繰り出した。

「ふんふふんふんふんふ～ん、ふぅうんふふんふんふんふ～ん」

「おい、うるさいぞ……時差ぼけで頭トチ狂ってるのは分かってるから落ちつけ」

午後の気だるい昼下がり。冷房の程良く効いた近所の喫茶店の秩序を乱す男が一人。

「はぁ……何と言うか、雰囲気変わりましたね」
「あはは……サキちゃん、中々酷い事言うんだね」
「サキもアイリも待ってたんだ、もう少し何か言う事は無いの？」
「仕方ないじゃないかＴｉｎｙ　Ｇｉｒｌｓ、全てがＢｉｇな国ＵＳＡから帰ってみれば、こんなにも小さいじゃないか我が故郷。あ、麦茶と抹茶アイス一つ」

ストレートど直球で和風テイストなオーダーをかますと、男は急に淀んだ瞳をいつもの澄んだ物へと切り替えた。

「ただいま、二人とも」
「えへへ、おかえりなさいませっ」
「本当に……お久しぶりです」

「「長谷川さん……っ」」

Four（後書き）

割とキャラも出そろってきました。早く進んでくれないかと一番思っているのは私ですｗｗ

Ｆｉｖｅ（前書き）

何か久々の更新です。帰省するためにバスに乗ったり船に乗ったりしている間に書き上げました。

Five

「ん……」

熱に浮かされ目を覚ます。そう言えば今日から8月だったか。

気だるい体を起こし、冷蔵庫に入っていた麦茶を飲む。何だか苦い、この時期のお茶の日持ちの悪さは本当に何とかしてもらえないものか。

愛莉がグラビア関係の撮影で南の島にロケに行っている間、私はひたすら自堕落に（バイトは行ってるし自主的にトレーニングも欠かしていない……ん、何でこんな事をしているのやら）生命を繋いでいた。

今日も何度か電話が来ているが、大抵美星からなので完璧に無視し、身だしなみを整えその辺に折り畳んであった衣服から薄めのTシャツとショートパンツを引っ張りだしドレスアップ、物が散乱した1Rにさよならを告げ外出する。

今日はこの前帰ってきたサキこと永塚紗季（ナガツカサキ）と会う手はずになっている。

奈良の大学に行ってしまったため（お好み焼きは関係ないと信じたい）高校卒業とともに疎遠になってしまった訳だが、久々会えるのだからこの機会を逃す手はない。

「ふう……危ない危ない」

噴水の前で一息入れる。時間は９：５４ジャスト。これなら文句を言われることも……

「ふひゃっ！！！！」

「ちゃんと五分前行動守れるようになったみたいね、マホ」

「ちょっ、なにすんだよ！！？」

妙ちくりんな声を上げて振り返った先には爽やかに頬を緩める蒼髪の幼なじみのすgべしっ。

「とりあえずその幻想（微笑み）をぶち壊させてもらった」

「その読ませ方無理矢理じゃないの！？　何はともあれ……久しぶり、マホ」

「おう……久しいな」

最後に出会った時と比べてもさほど何かが成長しているわけでも無かったのだが、一年半と言う時は彼女を確実に大人にしていた。

先月の頭（７／１）に誕生日を迎え二十歳を迎えた彼女、その次の日に誕生日を迎えた自分だったが、一日とは思えない程遠く突き放された感覚をずっと拭えないでいた。それは今も変わらないまま、言いようのない感覚に支配されている。

彼女がくれたのは、私とサキ両方が大好きな飲み物『メロンコーラ』、とりわけ振ってもいないのにプルタブを勢いよく引くと飛沫（しぶき）がスプリンクラーのように噴き上がり弾ける。

「んくっ、んっ……っ、ぷはぁっ！！！！！」

「ふう、折角暑いんだもの、こういう粋な飲み物で一息つきたい

じゃない？」

激しく同感だった。だがそれは此処まで走ってくるだろうと言うことを見越してのことだったのかと思うと少し腹が立つ。

いやいや、彼女の行為には素直に甘えておこう。これが皮肉だったら皮肉と分かっているけど甘んじて受けています的な何かが必要だと思うんだ。

「んで、動きやすい格好でって言うからそうしてきたけど、一体どうしたわけ？」

「まあ、久々会ったわけだけど……ほら、これ」

サキは水色のワンピースを着て、浅めのキャップを被っていた。ただそんな格好で走り回ったり跳ね回ったりしたら色々残念なものが見えると思うのだけれど。

と思って何かのチケットを受け取る。バスケの試合か、うちの県と隣の県のバスケチームの試合、公式の試合でも結果を出している二チーム……

「うおっとと、マホに預けると風で飛ばされるから私が持っておく」

「信用ねぇな私……ま、いいか」

今日は風が強い、責任はサキに全部押しつけるとしてだ。たまにはバスケを見る側に回るのもいいかもしれない。

Ｆｉｖｅ（後書き）

この後かなり修羅場になっていくかと思われます。まあそれは私の何時ものノリかと思いお付き合いくださいませ。

Ｓｉｘ（前書き）

ポンポン進めていきたいと思います。本当は時間を開けた方が良い事もあるのですが。

Six

「ちょっとアンタ、来てるなんて全然知らなかったんだけど！！？」

夏にも関わらず少しばかり肌寒い廊下に甲高い声が響く。

長い髪を後ろで一本にまとめた、勝ち気な瞳を湛えた大人っぽさの中にも幼さを残す彼女は、薄く白い頬を桃色に染めながら膨らませ、きっ、と猫のように睨む。

「ふう……まあ、ごめんな、葵」

「ごめんなじゃないわよっ！！！！　美星さんが教えてくれなきゃ気づかなかったんだから、また私の事なんてほっぽってどっかいく……」

昴は頭を掻く。上下共にバスケの試合着に着替え体も温まっている。

「……ま、まあ良いけどさっ。折角なんだから格好いいとこ見せなさいよねっ！」

「まあな、しっかり決めてやるさ」

笑顔を返し、昴は控え室へとつま先を向け足を踏み出す。

その時だった。

「す……」

「あ、マホちゃん」

「あっ……」

出会ったのだ。私とサキは、すばるんとあおいっちに。今のサキの一言は残念ながら聴き逃せなかった、聴き逃せなかった……！！

「久しぶり、マホちゃんも試合見に来たんd」

「こう言うことかよ、サキ」

「マホ……」

「久しぶりじゃんすばるん、元気そうで何よりだよ」

血が下唇から滲んでいるような錯覚すら覚えた。顔の筋肉がうまく働かない。自分はものすごく変な顔をしているのではないだろうか。

「今日の試合、すばるんも出るんだ？　すげぇじゃん、ファン想いの立派なスターだ、最高のプレー期待してっかんね」

「マホ……行きましょう」

「……」

すばるんは何も言わないでいた。私も何も言わない。何も言わずにきびすを返す。

「……すいません、長谷川さん」

「……今日のところは、試合を楽しんでくれると嬉しい」

サキは走っていく私を追いかけてきた。絶対に追いつかせまいと思っていたら、段差に足を引っかけバランスを崩し、左手を強く床に付く。それが決定的に二人の距離を縮めた。

「あのさぁサキ、休養思い出したんだけど、帰っt」

パチン、乾いた音が響く。眼鏡越しに滲む涙に自分は気づいていなかった。

「何も言わないのは悪かったって思ってる、でもあんただって……っ！！！！」

「そう熱くなるなって……もうあの時の私じゃない、私だって大人になった、世辞の一つくらい繕える」

「……」

嫌な奴だった。こうして、下らないことばかり覚えて汚い大人になっていく。

サキは何も答えなかった。私はサキに背を向け走っていく。追ってくるかこないかは知らないが、別にどうでもよかった。

Ｓｉｘ（後書き）

少し迷走気味なんですが、最後あたりの台詞は気に入っています。大人になることを求めた過去の真帆と、大人になった今の現実に葛藤する真帆の対比を表わしています。

Seven（前書き）

更新速度マジパネぇです。友人に挿絵の発注をしました。次回会った時には五島のお土産をお渡しせねばな。

Seven

私は、中学校最後の県大会で大きな失敗をやらかした。

最後のフリースローでいつものように笑顔をチームメイトに振りまいた自分は、今までの想像を絶する披露を騙していたことに気づいていなかったのだ。

その緊張を少しばかり緩めた。それが、体感していた重力を何倍にも引き上げた。

疲れきった身体は重いボールをネットまで飛ばしきることができなかったのだ。途中で失速し、最高点がネットの縁にすら届かず落下していく。そして、その光景が見える前に私は崩れ落ちたのだ。糸の切れた操り人形のように。

試合は負けだった。勝負は勝負、フリースローのやり直しなど認められるはずもない。あれだけ出しゃばってチームを鼓舞し盛り上げてきた自分が、最後の最後にチームメイトも応援に来てくれたみんなも裏切った。

それから、かつての五人がいつまでも一緒に居られないことを知る。ヒナは看護科のある県内でも有名な進学校へ、もっかんはスポーツ特待で全寮制の高校へ。ヒナはバスケを高校進学と共にやめていたことは後になって知ったことだったけれど。

そしてその年の末、すばるんが、長谷川昴がアメリカに行くことになった。彼が大学1年のことだった。長期の留学で、次に帰れるのは再来年の春と言うことだった。

『なんでだよ……』
『ごめんな、真帆……』
『何でだよ、どうして黙って行っちまうって言うんだよ……っ！！！！！！』

私は憤慨した。すばるんには高校でもバスケを教えて欲しかったから。とても勝手な話だった。無邪気で身勝手でどうしようもなくお子様な意志だった。

それでも……

それでももっかんは待つと言った。私達の最高のコーチが次は自分のために幸せになれるように背中を後押しした。私達の中で一番会えなくて辛いのはもっかんだったのに。

そんなもっかんを……

『何でそんなこと言うんだよ！！！　ずっと一緒にいるって約束したのに！！！！』

自分は果てない那由他の時間を待てなかった。もっかんは待つと言った。そしてそんなもっかんを。

パチン……

叩いてしまった。それでももっかんは何も抵抗せず一心に私を見つめてきた。逃げたのは私の方だった。

私はきっと誰よりも弱い。だからもしかしたら今も惰性でバスケ

を続けているのだろう。やめる勇気もなく、本気で続ける根性もなく。

すばるんにも、もっかんにも。かつて本気で向き合っていた人達にも本気では向き合えないままに。

Seven（後書き）

今後の展開は既に作成済みですが……ネタバレは控えさせていただきます。

Ｅｉｇｈｔ（前書き）

今回がこの話全編を通して一番書きたかった部分かと思います。その為に絵師さんに挿絵の発注したりで色々ご迷惑おかけしたり。

Eight

そんなことを考えながら街をぶらついて、ゲーセンで時間を潰したりして。気が付いたら遅いはずの日が暮れかかっていた。

公園では子供達の喧噪が聞こえて……聞こえて……

「……ん？」

あれは確か……千早結奈、だったか。あんなに目を釣り上げて……

「お前ら何すんだよ！！！！」

「うるせぇよ、仕方ねぇだろ壊れたもんは」

「壊したんだろうが！！！！」

「お前等みたいな低脳が此処を遊びのために使って良いと思ってんのかよ」

中等部の連中か。見た感じ体育会系の奴らだろうが、何とも気に入らないもんだ。

「ふざけんな……謝れよ！！！！」

「はいはい、すみませんでしたー」

下卑た笑いとともに彼らは帰っていく。残されたメンバー達も動揺を隠せないでいたが、次第に色々と理由を付けては散り散りになっていく。

「お前ら、こんくらいで諦めんなよ！！！！」

「そんなこと言ってもどうするんだよ……」

「そうだよ、またあの人達来るだろうし、私はもう此処で練習するの諦めた方が良いと重う」
「そんなこと……悔しくないのかｙ」
「悔しいに決まってるだろ！！！！！！」

今の男バスのキャプテンだった。確かバスケ以外の何かで新聞に載っていたような気がする。夏陽とはまた違ったタイプの優等生という事か。

「この件は大人に任せよう……俺達は、何も出来やしない」

最後に残った彼が、そう言い残して去っていった。

「……うううぅ……うううぁぁぁぁ……」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！！！！」

夕闇に響く少女の慟哭が耳に痛く突き刺さる。彼女の後ろには破壊されたバスケットゴール、何かを強くぶつけられ籠が外れて落ちている。

「くそぉっ……折角、せっかく壊れてるのをみんなで直したのに……っ」

確かに、よく見ればゴールは非常に不格好だった。ただ手作りなりに非常によく作り込まれている。

どこかで拾ってきたらしいリングをパネルに固定しネットをまきつけて、棒を立て上部にがっちり結びつけていた。

何というかまあ……懐かしいじゃないか。

「……おい」
「……ふぇ？　あ、あんたは……」
「直してやるよ、手伝え」
「べっ、別にあんたの助けなんて……」
「うるせぇよ。それにまあ……少し懐かしくなったんでな」
「え……？」

確かあれは合宿の時。ゴールがなかったため自分達でゴールを作ったことがあった。あのときはみんな、そうナツヒも一緒で、知恵を出し合い材料を探しあい、不格好ながらもちゃんと実用に足るバスケットリングを作り上げた。

懐かしい話だ。そして、体も自然に動いていた。公園にある廃材、たとえばロープやベニヤ板、鉄パイプなどを組み合わせて修理していく。

「ほら、こっち引っ張ってくれ」
「あ、ああ……っ、しょっ！！！」
「っ、なかなか力あるじゃねぇか」
「当たり前だっ、鍛え方が違うんだよっ！」

板にネットを固定し、とりあえずゴールは出来上がった。さて、これをどうやって取り付け……

「ん、どうしたんだ真帆」
「おおっナツヒっ！！！！　こんな時にしか役にたたないっ！！」
「何てひどいことという人だ……」

全身をジャージに身を包みロードワーク中だった竹中夏陽が通りがかる。渡りに船とはまさにこのこと。

結奈は若干引き気味だったが、この男は恐らく人間が出来てきているのでまあ大丈夫だろうと希望的観測で何とかやりきってみた。

「竹中先輩、ありがとうございましたっ！！　それから……三沢先輩も」

「……ん」

「この前はすみませんでした……私、あれからずっと走り込んで、飛んで、ボールを突き続けて、少しだけどわかった気がして……」

「はいはい分かった分かった。やっと私の偉大さが分かったってんだな。まあ今日は帰れ、もう夜も遅いだろ？」

彼女はぺこりとお辞儀をすると、夜の闇に消えていった。

「なあナツヒ……」

「……どうした？」

「どうやってヒナをモノにしたんだ？　そんなCV杉田みたいなダンディーな声して」

「それ関係ないだろ……高2の時あいつの高校の文化祭に行ったとき、呼び出して単純に正面から告白した。そしたらあいつ、何て言ったと思う？」

『たけなかがずっと幸せにしてくれるって言うなら、良いよ』だとさ、彼は笑いながらも頬を赤らめていた。少し羨ましい話だ。

別に周りにいい男なんていないから彼氏なんて欲しいとは思ったことなど最近ないのだが、そう言う話を聞くと羨ましく思ってしま

う。

「それじゃ、俺は行くよ……なあ、バスケの件、まだ何も言ってないんだろ？」

「当たり前だろ……私みたいな半端者はいらないんだ。半端に続けるなら、いっそ続けないですっぱり縁を切った方が良い」

「そうか……頑張れよ、真帆」

頑張れ、か……走り去っていく彼の背中はとても大きく見えて、あんな彼氏にベタ惚れしてもらえるヒナに少しだけ嫉妬する。

そう言えば、こんな事を思い浮かべても嫉妬ってなんだ嫉妬はと思ったことだろう。だけれど今は違う、今ならナツヒの悪いところも良いところもまとめて全て受け入れられる。

……右のかかとに何かが当たる。それは誰かが忘れていたバスケットボールだった。

いや、その誰かは、そこにボールがある事を忘れていた誰かは、もしかして……

『一緒にバスケしようぜっ！！！！』

「……」

まさか、昔のどうしようもなくバカでアホで無鉄砲で……

＞i385540｜3587＜

誰よりもバスケにたいし一生懸命だった小学生時代の自分に励ま

されるなんて。
　私はバスケットボールを手に取り（誰かから受け取ったような錯覚を受けた）、作ったばかりのゴールを見据える。

　膝を曲げる。大きく息を吸い、全身に血を巡らせる。

「はい……れぇえっ！！！！」

　ボールは緩やかな放物線を描き、ゆっくりとゴールに吸い込まれていく。

　決めた。もうこれで終わりだ。もう今後は止めてしまおう。惰性で続けても何の意味もない。

　だから、行くんだ。今度は全力で。もう一度あの舞台へ。

『何かチョー楽しいっ！！！』
『楽しいって事は、間違ってないって事だ！！！　自分の感覚ってもんを大事にしなくちゃな！！！』
『ぜってーそう、そうに決まってる！！！！』
「……ああ、そうだよ。まさかあんたみたいなどうしようもないアホに教わるなんてさ……」

　ありがとう、マホ……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――

Ｅｉｇｈｔ（後書き）

マホが救済されるきっかけ、嫌っていた過去の自分にもう一度大切な物を思い出させてもらう所です。
ナツヒとマホの絡みも、結奈との和解も全て予定していた事ではありましたが、かなり色々推敲しました。どう表現すればもっと想いが伝わるだろう、トーク下手な私ですがこうしてひたすら時間をかけて言葉を選べるのですから、その手間は惜しみませんでした。

イラストを描いて下さったｎｅｃｃｏｍ様にも厚くお礼申しあげます。本当に助かった。

Ｎｉｎｅ（前書き）

書きためているのでそろそろ出していこうかと思います。

Nine

「あんた、マホ……??」

その日の夜、みーたんの厚意で初等部の体育館を借りて練習していたバスケメンバーの元へ私は単身乗り込んでいた。

コーチかぶれのみーたんが必死に指示を送り練習が行われている。もっかんとサキとヒナとアイリーン、あの日夢に向かって突き進んでいたチームメイトの姿がそこにはあった。みんな特注品の赤い試合着に身を包んで玉のような汗を流しながら練習に打ち込んでいる。

「ちょっと、サキの話だと絶望的だって……」
「みほし、少し黙ってると良い」
「ひなたってそんなだっけ……?」
「みんな、練習止めちゃって申し訳ない!!! その場所で良いから聞いてくれ!!!!!!」

いつだってバカみたいに騒ぐことしか脳がない自分だった。だからこそ敢えてその愚をまたおかそう。

「ずっと連絡してなくてすみませんでしたっ!!!!! 今からでももしよろしければ、チームに入れてもらえませんかっ!!!!!!!??? 」
「「「「「……」」」」」

体育館中のガラスを振動させるほどの大声を張り上げ、頭を下げたまま微動だにしない。一瞬流れる沈黙、その後に五人はどっと自分の元へ押し寄せた。

「お帰りっ、お帰りだよマホっ！！！」
「アンタってばもう、心配ばっかりかけるんだからぁ……」
「やれやれ……ま、これで全員集合だね」
「マホちゃん、やっと一緒だねっ！！！」

もっかんが、サキが、ヒナが、アイリーンが、笑顔でやってきてくれた。それを一歩離れた場所から日和見する我らが恩師。

「ほら、先生もっ！！」
「うわっとととっ……だから私は生徒の自主性を重んじてだな……」
「と言いつつ本当は？」
「うわーん会いたかったよぉおぉおおーーーっ！！！！！！」

自分の胸の中にもすっぽり収まってしまうくらいに小さくなってしまった先生を抱きしめ、胸元を伝う滴の温かさに私自身も涙を流した。

何だろうこの感じ、何というかこそばゆい。

「ただいま～……っ」
「昴……お前少しは空気を……」
「みーたん、いいんだ……すばるん」

大量の買い物袋を抱えて戻ってきたすばるんの元へ私は駆け寄った。

「……半分持つよ」
「え……あ、ああ」

重い。半分だけでも重いなこの荷物。これを片手で一つずつ、両手に持ってきたのだ。

すごいなぁ……私らが心底心酔した最高のスターは。

何とか必死でサキ達の居たところまで涼しい顔を取り繕い持ってくる。

中に入っていたのは飲み物や冷却スプレー、栄養価の高い固形食だった。それらを取りやすいように並べておき、すばるんの方に向き直る。

「すばるん……」……もう目をそらさない。ちゃんと見るんだ。かつての業に、身勝手な自分に。

「今まで、本当にごめんなさい。すばるんの気持ちも考えずひどいことばっかり言って……許してもらえるとは思ってない、だけど……もしそれが叶うなら、償わせてほｓ」

「真帆」

「っ……はいっ！！！！」

もう逃げないと決めた。すばるんの強い瞳を見つめ返す。もう、目は逸らさない。

「ずっと……言えずにいた。いなくなってごめん、ずっと音沙汰もなく放置してごめん……」

「約束、ずっとバスケ教えるって約束……破って、本当にごめん

なさい」
「すばるん……っ、ううっ……ぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあーーーーーーっ！！！！！！！！！！」

同じ事を思っていたのか、自分もすばるんも。お互いがお互いから目を背けて距離が遠ざかるままになっていた状況を打開したくてそれでも動けずにいたのか。

そこには恥も外聞もなかった。ただただ幼い少女のように、大きな胸の中で涙を落として喚き散らした。

「ほん、どにぃっ……ごめ〝ん、なざい〝ぃぃっ……んぐっ、えぐっ、ひぃんっ、んふっ……」
「……」

静かに慟哭だけが反響する。閑散とした体育館に、ぐずる音と嗚咽が寂しく鳴るだけ。

そう言えば、前に硯谷女学園に遠征に行ったときも。私がショックで逃げ出した時もすばるんは私を散々追い回して見つけてくれた。私が悪いのに謝ってくれた。全てはバスケを知らない私達が絶望しないで、バスケを精一杯楽しめるように気を使ってくれたからだったのに。

「俺のせいで、バスケ……嫌いになったんじゃないかって」
「……バスケ、楽しーもん。やめるわけ、ないじゃん」

あの時と同じ言葉をぶつけた。認めたくなかったが、自分はどんなに腐っても、根源に根付いたバスケを愛する気持ちだけには嘘がつけなかったらしい。

「……良かった。すごく、嬉しい」
「だから……みんなっ！！！　もう一度、お願いしますっ！！！！！！」

「うんっ！！！」
「……しゃーない」
「やるかっ……！」
「勿論だよっ！！」
「にゅふふ、まとまったみたいだね！？」
「ああ、それじゃあ、行くぜっ！！！！！」

円陣を組む。二度とほどけないくらい固く。私の反対側にはすばるんがいて。周りを見ればみんながいる。

「「「「「「「「「おおおっ！！！！！！！！！！」」」」」」」」」

Ｎｉｎｅ（後書き）

もう少し続きそうですね。何か書くたびに作品の長さが伸びて行く気がします。

Ｔｅｎ（前書き）

絶対やるまいと思っていましたがやっちゃいました試合パート。ポジションどころかルールすら微妙に分かっていない私ですが温かく見守って下さい。いやホント、クオリティの低さは致し方ないんで許して下さい。

Ten

それから二週間後、御盆の日に決行された慧心学園と硯谷女学園の親善試合は最後のフリースローで慧心の勝利に終わった。

結局一度もまともにコーチング出来なかったが、結奈のフットワークは異常だった。最後の勝利を決めたフリースローのフォームもさる事ながら、全てにおいて何段階も成長していた。しっかり自分が言ったことを遂行したのだろう。最初は反発したかもしれないが、彼女にはプライドよりも大事なものがあったという事だ。

硯谷の麻奈佳コーチも彼女の動きには釘付けだった。今回の親善試合はいろんな人が見に来ていたようだし、もしかしたら彼女には方々からスカウトが来るかもしれない。

あの日の、もっかんみたいに……

「……っとっと」

両頬をパチパチと叩く。感傷に浸っている場合ではない。次は自分たちの番なのだから。

慧心ＯＧのメンバーは全員が赤い試合着に身を包んでいた。『ＲＯ－ＫＹＵ－ＢＵ！』のロゴが眩しい。

相手方のメンバーも試合着に身を包みコートに現れた。先陣を切るのはかつての最強のライバル、藍田未有（アイダミユ）だ。恐らく今でも現役で、第一線で活躍しているのだろう。

最後にあったときよりもなお背が伸びている。チャームポイントのリボンは変わらず彼女の後頭部に花を添える。

「よぉ、久しぶりだなちびリボン。今はでかリボンか？」

「……そうね、ちゃんと全員集まってくれて嬉しい。あの日の礼、しっかりさせてもらわないといけないから」

全身を流れるオーラがけた違いだった。紛れもない、比類なき達人。月日はこのプレイヤーを死角無き魔物に育ててしまったらしい。

だが、それでも負けない。最高のコーチに調整してもらったんだ、五人の個性を融和した最強のチームが負けるわけがない。

そうだろ、すばるん。日本のエース、最強のポイントフォワード、究極のユーティリティープレイヤーさんよ。

「よっし、それじゃあ試合を始めます。……二人とも、本気でぶつかりなさい」

本来ならジャンプボールはアイリーンに任せるのが適任だ。しかし、相手方のジャンプボールには未有が出てきた。他にもっと背が高い人もいるというのに。

これは彼女からの挑戦状。受けない方が勝率は上がる。だが、それは出来ない。かつての自分なら売られた喧嘩は買う精神で一も二もなく受けていた話、だが今は違う。

全力でぶつかりたがっている元ライバルの申し出を、突っぱねるなど無礼千万。

「それでは……試合、スタート！！！！」
「「はぁぁあああぁぁあっ！！！！！！」」

同時に飛翔。同時にボールに手が当たる。そして同時に二人の手が弾かれた。ボールはセンターラインの上に落ちた。まずは互角、ボールは相手チームの手に渡る。

「行くよミユっ！！！」
「当然っ……っ！？」
「へへっ、別に個人的に恨みがあるわけじゃないけどさ、アンタはとりあえず封じないといけないでしょうに」

このチームが現役の頃と同じやり方で行くなら間違いなく攻守の主軸はでかリボンだ。だったら、こいつを押さえられるのは私しかいない……っ！！！！！

「ちっ、友香（ユカ）パスっ！！！」
「させないよ！！！」
「なっ……っ！！！」

パスが決まって進軍しようとした刹那にヒナのスティールが決まる。その今もなお低い身長と類稀なるバランス感覚から繰り出される低空ドリブルに相手方はとても1対1では止められない。

「くっ……センター前出て！！　私が止めるっ！！！」
「くっ……真打ち登場かい？」
「強敵だって認定してあげる、でもこの牙城は崩させない！！！」

でかリボンはゴールしたまで進軍したヒナの前に立ちはだかる。私にはわかる、これは別に彼女のワンマンプレーなどではない事を。

でかリボンはそこまで身長が低いわけではないが、チーム内で相対的に見ればかなり小柄である。小柄でないと勢いの乗ったヒナは止められないのだ。

「それなら……行くよ！！！」
「無駄っ……そして温いっ！！！！！」
「くっ……！！」
「ヒナ、あがって！！！　私が止めるっ！！」
「だから無駄って……っ、パス！」

サキの進軍にもっかんが後衛としてつく形で二人がかりで持っていこうとした策が即座に読まれ、別の人間にパスが渡る。

サキと同等の視野を持ち、且つそれが個人内で処理されず周囲の仲間と共有できるだけのセルフコントロールが利くようになった彼女の能力が此処まで恐ろしいとは。

正確で奪い取りがたいパスの押収ですぐに硯谷は上がってくる。そして再びでかリボンにボールは回った。

ゴール前、守りはアイリーンだけしか物理的に間に合わない。そこを突破されれば間違いなく先制点を許してしまう。

「久しぶりだね、雑誌越しにいつも見せてもらってるけど……コートの中で会うのはホントに久しぶり」
「……」
「どれくらい変わったか……見せてみてよっ！！！！！」
「ひっ……」

かなり乱暴なオフェンスで、でかリボンはアイリーンを抜こうとした。アイリーンの体が横に逸れる。だが次の瞬間……

「……なんて、いつまでも子供じゃ無いですから！！！」

「おっしゃ、やったぜアイリーン！！！！！」

「智花っちゃん、パスっ！！！！！」

群を抜いて高い身長の名センターから繰り出されるパスは誰にもカットできない。前進したもっかんが難なく受け取り……

リミッターを、外すっ……

「行くよ、硯谷さんっ……！！」

静かに、しかし煌々と燃える蒼い闘志。かつて県屈指のスピードを誇ったその小さなエースの潜在能力が炸裂した。

その神速はもっかんのマークについていたディフェンスを完全に置き去りにして、私とサキのマークも動員して尚振り切られる。

あっと言う間にゴール前、しかし相手のセンターもでかい。正直言って、飛べば余裕でネットに掴まれるくらいの身長を持っている。

かといって迷っている暇はない、恐らくこのシチュエーションでもっかんの潜在能力を見せつけられた今なら彼女一人を止めるのに人材の投入は惜しまないはず。

「さあ、どうするエース！？」

「逃げませんよ……私のコーチも、逃げませんでしたからっ！！！」

高く弧を描くシュート。圧倒的に命中精度の悪い一撃だったが、普通に打っても弾かれるのだからしょうがない。

「くっ……入れさせない！！！！」

「それなら、入るまで攻めるだけです！！！」

「よっしゃ、任せろッ！！！！」

もっかんが打ったのは多少右寄り、入るか微妙だが守る側としてはカットせざるを得ない微妙な位置に打ち込んだのだ。

それをカットすれば必然的にボールは右寄りで弾かれる。それを私は受け取った。

「ぶちかませっ、打ち上げ花火（ファイアー・ワークス）！！！！」

「おうっ、任せろ！！！！」

みーたんの声を聞いても気恥ずかしさなど微塵もない。足も軽い。意識もはっきりしている。そしてその瞳はゴールを捉えて離さない。

今なら飛べる。あの日の失態を断ち切るために……

（決めてみせる、すばるんが教えてくれたこと、此処でっ……）

（全て出し切るんだっ！！！！）

「いいいっけぇぇぇぇぇーーーっ！！！！！」

ボールはネットに吸い込まれ……

ピピィイイーーーッ！！！！！　ホイッスルが高々と鳴り響いた。

「よっしゃぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

「ふう、まあやったんじゃないの！！？」

「お疲れ、マホ」

近くにいたサキとヒナが冷淡ながらも暖かく祝してくれた。やっと……本当の意味で全てが繋がった気がする。

やっと戻れた。自分が居たかった場所に。

「よぉし、まだ二点差しかないんだ。まだまだ突き放すぞっ！！！」

「「「「おおっ！！！！！」」」」

「はぁっ、はぁっ……っ、そぉおおおっ！！！！！！！」

結論、負けました。いや、本来一言で言い表すべきではないのだけれども。色々なドラマがあったのであるけれど、それはまた次の機会に。

私はコート内に寝っころがり叫ぶ。だが……これだけ充実した試合も無かった。もしかしたら中学最後の試合が終わって以来のことかもしれない。

「はぁ、はぁ……ほら、マホ立って」

「最後に並んで挨拶するまでが試合って前に教わらなかったのかい？」

「あーもう、うっせぇな二人とも。ったく、昔はヒナはこっち寄りだと思ってたのに」
「「あはは……」」

苦笑するもっかんとアイリーン。すっかり真面目キャラに身を堕としてしまった（いてっ←当然サキさんのせいです本当に（ｒｙ）ヒナに悪態をつき、つきつつも迅速に跳ね起き並ぶ。

「それでは、硯谷女学園ＯＧと慧心学園ＯＧの試合を終了する」
「ありがとうございましたっ！！！！！！」

終わってみれば懐かしの戦友同士、清々しいものだった。慧心学園ＯＧのメンバーは実際に大会で結果を出していることなどは別に何の関係もないのだろうが、あの時のような居心地の悪さはない。お互いがお互いを最大最強の好敵手と思っているからこそ、最大限の力でぶつかり合えたのだ。

「むかつくけど、やるじゃない……真帆」
「あんたもな……未有」
「……ふふっ」
「……ははっ」

「「はぁぁあああああぁああああっ！！！！！！！」」

がっしりと握手を交わした。相手が痛がるくらい強く握りしめようとしたのだが、それはお互いに同じことだった。汗で互いの手が滲むが、二人の熱気でそれはすぐに蒸発する。

「はぁ……」

幾重にも連なる溜息が小綺麗な体育館を埋め尽くしていった……

Ｔｅｎ（後書き）

最後の握手をする二人は気に入ってます。個人的にはネギまでのネギＶＳラカンのラストでラカンが手を差し伸べた所にクロスカウンターをぶち込む両者みたいな感じを出せたらなと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1388x/

ロウきゅーぶ!　真帆アフター　～Ｓｈｉｎｙ－Ｆｒａｐｐｅ・真夏に咲く大輪

2012年1月10日00時46分発行